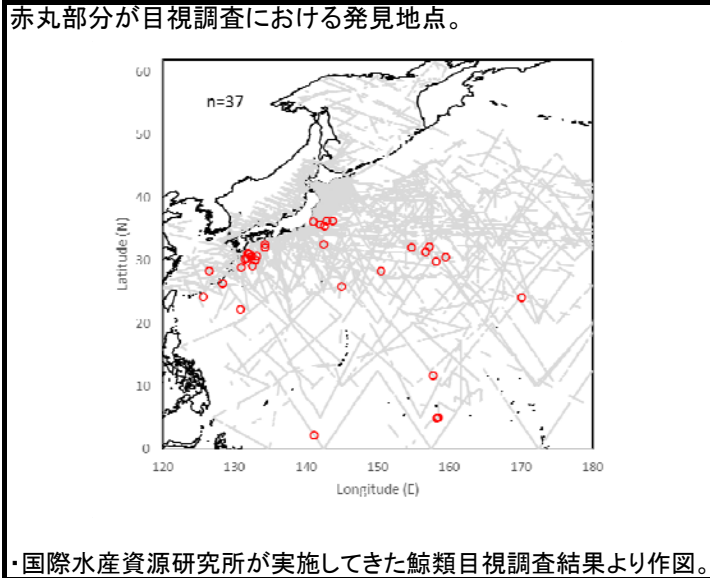


目名	科名	和名	学名
クジラ目	マイルカ科	カズハゴンドウ	<i>Peponocephala electra</i>

評価結果
ランク外

・分布域の状況:

赤丸部分が目視調査における発見地点。



・国際水産資源研究所が実施してきた鯨類目視調査結果より作図。

・存続を脅かす要因の具体的説明(捕獲採集圧以外)

存続を脅かす要因は考えられない。

・捕獲採集圧の状況

- ・捕獲はない。
- ・2004～2013年に25件の座礁・混獲が報告されている(石川ら(2013)、石川(2014))。

・個体数減少の状況

- ・個体数減少の要因は見当たらない。

・評価に用いた系群又は個体群

系群に関する情報は不明だが、太平洋東経海域に分布する個体を対象とした。

・評価に用いなかった系群又は個体群

系群に関する情報は不明。

・特記事項

- ・2006～2007年の推定値で、北西太平洋(日本の太平洋岸)で47,696頭との推定値があるが、1点のみである(Okamura et al. (投稿中))。本種も含めたゴンドウクジラ類は一般的に社会構造が複雑である可能性があり、社会構造が比較的単純なカマイルカのような動態モデルでの動態予測は現実的でない。

手順1 定量基準の適用

1-1 カテゴリーを判定するに足る情報がある場合

→ 基準Eまたは準基準Eの適用へ

1-2 カテゴリーを判定するに足る情報がない場合

○ → 手順2へ

<基準E>

※ 密度効果ありと密度効果なしの判定結果のうち、最も絶滅リスクが高いものを採用する。

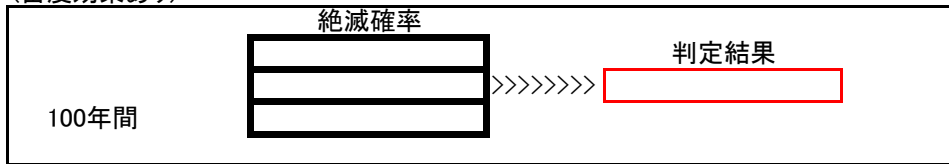
※ カテゴリーの基準は以下のとおり。

期間	絶滅確率	カテゴリー
10年間 or 3世代	50%	CR
20年間 or 5世代	20%	EN
100年間	10%	VU

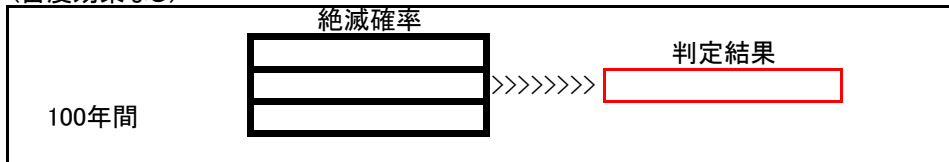
※ 期間については、10年間もしくは3世代、20年間もしくは5世代のどちらか長い期間を用いる。

世代時間= 年

(密度効果あり)



(密度効果なし)



<準基準E(簡易E基準)>

世代時間= <input type="text"/> 年	Year= <input type="text"/>	直近年
MVP= 500	N= <input type="text"/>	<input type="text"/>
Nt/MVP= <input type="text"/>		
% decrease= <input type="text"/>		
基準減少率(1-r**)	観測された減少率(1-r**)	判定結果
cr <input type="text"/>	>	<input type="text"/> >>>>>> <input type="text"/>
en <input type="text"/>	>	
vu <input type="text"/>	>	

定量基準の適用の結果

→ 絶滅危惧以外の場合は手順2へ

→ CR, EN, VUの場合は手順4へ

定量基準の判定に関する具体的説明

手順2 NT/LPの基準の適用

2-1 NTの 카테고리を判定するに足る情報がある場合 → 以下の表に記入
分布域の一部において以下のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行しうるおそれがある。

a) 個体数が減少している。	<input type="checkbox"/>
b) 生息条件が悪化している。	<input type="checkbox"/>
c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。	<input type="checkbox"/>
d) 交雑可能な別種が侵入している。	<input type="checkbox"/>

2-1-1 NTの基準に該当する → NTとして基準の適用結果へ

2-1-2 NTの基準に該当しない → 2-2へ

2-2 LPの 카테고리を判定するに足る情報がある場合 → 以下の表に記入
地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高く以下のいずれかに該当する。

① 生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱ふべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルでみた場合絶滅に瀕しているかその危険が増大しているとは判断されるもの。	<input type="checkbox"/>
② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大しているとは判断されるもの。	<input type="checkbox"/>

2-2-1 LPの基準に該当する → LPとして基準の適用結果へ

2-2-2 LPの基準に該当しない → ランク外として基準の適用結果へ

2-3 NT/LPの 카테고리を判定するに足る情報がない場合。 → 手順3へ

NT/LPの基準の適用結果

ランク外 → 手順4へ

NT、LPの判定に関する具体的説明

・ 個体数推定値と座礁・混獲数からも、直ちに減少する要因は想定できない。

手順3 DDの基準の適用

3-1 容易に絶滅危惧の 카테고리に移行する属性がある場合

→ 以下の表に記入し、DDとして定性基準の適用結果へ

a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。	<input type="checkbox"/>
b) 生息地が局限されている。	<input type="checkbox"/>
c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。	<input type="checkbox"/>
d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。	<input type="checkbox"/>

3-2 容易に絶滅危惧の 카테고리に移行する属性があるか不明である場合

→ ランク外として定性基準の適用結果へ

DDの基準の適用の結果

ランク外 → 手順4へ

DD、ランク外に関する具体的説明

・ 資源量推定値もあり数値も大きい、また分布域も熱帯域から温帯域に広く分布する、さらに混獲・座礁は年2.5件と少ないことなどから、DDの基準に該当しないと判断できる。

手順4 付加的な事情の考慮

手順1～3によるカテゴリー案

ランク外

4-1 定量基準又は定性基準によるカテゴリー案の妥当性に看過できない懸念があるか否か

4-1-1 懸念がない → カテゴリー案を維持して手順5へ

4-1-2 懸念がある → 以下の表に記入し4-2へ

1) 自然変動による評価の妥当性への影響	
2) 再生産力による評価の妥当性への影響(成熟年齢、産卵数、寿命等)	
3) 持続的な資源管理による意図的な個体数減少	
4) その他の事情による評価の妥当性への影響	

4-2 1)～4)の付加的な事情があるか否か

4-2-1 付加的な事情があるとはいえない

→ カテゴリー案を維持して手順5へ

4-2-2 付加的な事情がある

4-2-2-1 カテゴリー案の妥当性に影響があるとは判断できない。

→ カテゴリー案を維持して手順5へ

4-2-2-2 カテゴリー案の妥当性に影響があると判断できる。

→ 具体的説明を記入し、カテゴリー案の変更について検討

上記付加的な事情の具体的説明

・資源量推定値、分布域、混獲・座礁の情報から、ランク外の判定を覆えず要素は見当たらない。
・日本哺乳類学会は、日本近海の本種について希少と判定している(日本哺乳類学会編(1997))。なお、同学会のIUCN新基準仮評価ではDD(情報不足)と判定している。

上記検討の結果、カテゴリー案を 維持する → 手順5へ

手順5 最終カテゴリー

ランク外

・引用文献

・Perryman, W.L. (2002). Melon-headed whale, *Psponocephala epectra*. In: (Perrin, et.al. eds.) ENCYCLOPEDIA OF MARINE MAMMALS. p.733-735. Academic Press, New York.
・石川創、後藤睦夫、茂越敏弘.(2013).日本沿岸のストランディングレコード(1901-2012). 下関鯨類研究室報告 No.1:314pp.
・石川創 (2014). ストランディングレコード(2013年収集). 下関鯨類研究室報告 No.2:21-43.
・Okamura, T., Kanaji, Y. and Kishiro, T.; (in contribution). Abundance estimates of small cetaceans around the Pacific coast off Japan.
・日本哺乳類学会編(責任編集:川道武男). (1997). レッドデータ 日本の哺乳類. 文一総合出版. 279pp.

海洋生物の希少性評価

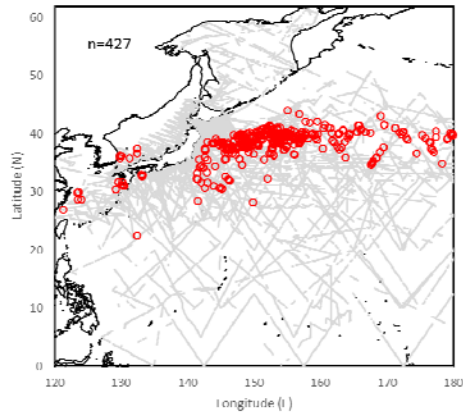
整理番号 80

目名	科名	和名	学名
クジラ目	マイルカ科	マイルカ	<i>Delphinus delphis</i>

評価結果
ランク外

・分布域の状況:

赤丸部分がマイルカ属の発見位置。日本東方沖合はマイルカ、九州周辺・東シナ海に近縁種ハセイルカが分布する。



・国際水産資源研究所が実施してきた鯨類目視調査結果より作図。

・存続を脅かす要因の具体的説明(捕獲採集圧以外)

存続を脅かす要因は考えられない。

・捕獲採集圧の状況

- ・捕獲はない。
- ・2004～2013年に34件のマイルカ属の座礁・混獲が報告されているが、種類別(マイルカとハセイルカ)の頭数は不明(石川ら(2013)、石川(2014))。
- ・1992年まで操業していた大規模公海流し網で年間約4,000頭が混獲されていたとの報告(Hobbs and Jones (1993))があるが、現在同漁業は禁止されており混獲の脅威はない。

・個体数減少の状況

- ・個体数減少の要因は見当たらない。

・評価に用いた系群又は個体群

系群に関する情報が不明だが、対象としたのは太平洋東経海域に分布する個体。

・評価に用いなかった系群又は個体群

系群に関する情報は不明。

・特記事項

1990年代前半までは、近種のハセイルカ(九州周辺・東シナ海・黄海・日本海に分布)とは分類上区別されていなかった。

手順1 定量基準の適用

1-1 カテゴリーを判定するに足る情報がある場合

→ 基準Eまたは準基準Eの適用へ

1-2 カテゴリーを判定するに足る情報がない場合

→ 手順2へ

<基準E>

※ 密度効果ありと密度効果なしの判定結果のうち、最も絶滅リスクが高いものを採用する。

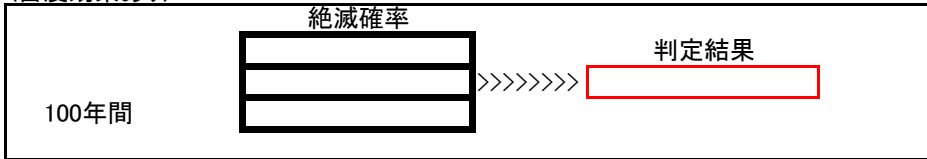
※ カテゴリーの基準は以下のとおり。

期間	絶滅確率	カテゴリー
10年間 or 3世代	50%	CR
20年間 or 5世代	20%	EN
100年間	10%	VU

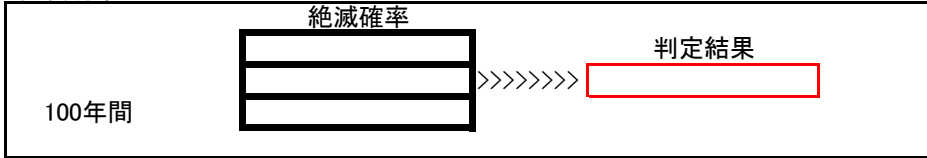
※ 期間については、10年間もしくは3世代、20年間もしくは5世代のどちらか長い期間を用いる。

世代時間= 年

(密度効果あり)



(密度効果なし)



<準基準E(簡易E基準)>

世代時間= <input type="text"/> 年	Year= <input type="text"/>	直近年	<input type="text"/>
MVP= 500	N= <input type="text"/>		
Nt/MVP= <input type="text"/>			
% decrease= <input type="text"/>			
基準減少率(1-r**)	観測された減少率(1-r**)	判定結果	
cr <input type="text"/>	>	<input type="text"/>	>>>>>> <input type="text"/>
en <input type="text"/>	>		
vu <input type="text"/>	>		

定量基準の適用の結果

- 絶滅危惧以外の場合は手順2へ
- CR, EN, VUの場合は手順4へ

定量基準の判定に関する具体的説明

手順2 NT/LPの基準の適用

2-1 NTの 카테고리を判定するに足る情報がある場合 → 以下の表に記入
分布域の一部において以下のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行しうるおそれがある。

a) 個体数が減少している。	<input type="checkbox"/>
b) 生息条件が悪化している。	<input type="checkbox"/>
c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。	<input type="checkbox"/>
d) 交雑可能な別種が侵入している。	<input type="checkbox"/>

2-1-1 NTの基準に該当する → NTとして基準の適用結果へ

2-1-2 NTの基準に該当しない → 2-2へ

2-2 LPの 카테고리を判定するに足る情報がある場合 → 以下の表に記入
地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高く以下のいずれかに該当する。

① 生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルでみた場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。	<input type="checkbox"/>
② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。	<input type="checkbox"/>

2-2-1 LPの基準に該当する → LPとして基準の適用結果へ

2-2-2 LPの基準に該当しない → ランク外として基準の適用結果へ

2-3 NT/LPの 카테고리を判定するに足る情報がない場合。 → 手順3へ

NT/LPの基準の適用結果

ランク外 → 手順4へ

NT、LPの判定に関する具体的説明

・ 中緯度海域に沿岸から沖合まで広く分布し、地域的に孤立した個体群が存在する根拠は乏しい。また、個体数の動向に関する情報も乏しい。

手順3 DDの基準の適用

3-1 容易に絶滅危惧の 카테고리に移行する属性がある場合 → 以下の表に記入し、DDとして定性基準の適用結果へ

a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。	<input type="checkbox"/>
b) 生息地が局限されている。	<input type="checkbox"/>
c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。	<input type="checkbox"/>
d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。	<input type="checkbox"/>

3-2 容易に絶滅危惧の 카테고리に移行する属性があるか不明である場合 → ランク外として定性基準の適用結果へ

DDの基準の適用の結果

ランク外 → 手順4へ

DD、ランク外に関する具体的説明

・ 捕獲はない。混獲・座礁の報告件数も年3.5件と少ない。
・ 沿岸から沖合まで広く多数分布しているが、系群の情報は不明である。
・ 1990年代前半までは、近種のハセイルカ(九州周辺、東シナ海・黄海・日本海に分布)とは分類上区別されていなかった。
・ 以上より、容易に絶滅危惧の 카테고리に移行する属性は不明である。

手順4 付加的な事情の考慮

手順1～3によるカテゴリー案

ランク外

4-1 定量基準又は定性基準によるカテゴリー案の妥当性に看過できない懸念があるか否か

4-1-1 懸念がない → カテゴリー案を維持して手順5へ

4-1-2 懸念がある → 以下の表に記入し4-2へ

1) 自然変動による評価の妥当性への影響	
2) 再生産力による評価の妥当性への影響(成熟年齢、産卵数、寿命等)	
3) 持続的な資源管理による意図的な個体数減少	
4) その他の事情による評価の妥当性への影響	

※4)を用いようとする場合には、手引の4条件を満たすことを確認してください。

4-2 1)～4)の付加的な事情があるか否か

4-2-1 付加的な事情があるとはいえない

→ カテゴリー案を維持して手順5へ

4-2-2 付加的な事情がある

4-2-2-1 カテゴリー案の妥当性に影響があるとは判断できない。

→ カテゴリー案を維持して手順5へ

4-2-2-2 カテゴリー案の妥当性に影響があると判断できる。

→ 具体的説明を記入し、カテゴリー案の変更について検討

上記付加的な事情の具体的説明

・本種は外洋性であり、座礁・混獲のほとんどは、沿岸性で近種のハセイルカの可能性が高い。
・日本哺乳類学会は、不能と評価している(日本哺乳類学会編(1997))。また、同学会によるIUCN新基準仮評価はなされていない。

上記検討の結果、カテゴリー案を 維持する → 手順5へ

手順5 最終カテゴリー

ランク外

・引用文献

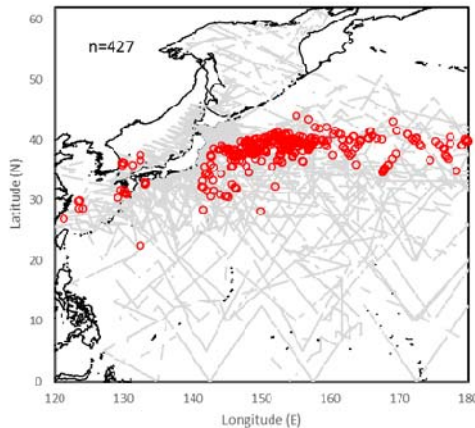
・Perrin, W.F. (2002). Common dolphins, *Delphinus delphis*, *D. capensis*, and *D. torpicalis*. In: (Perrin, et.al. eds.) *ENCYCLOPEDIA OF MARINE MAMMALS*. p.245-248. Academic Press, New York.
・Hobbs, R.C. and Jones, L.L. (1993) Impact of high seas driftnet fisheries on marine mammal population in the North Pacific. *Bull.Int.North Pac. Fish. Commn*, 53:109-434.
・石川創, 後藤睦夫, 茂越敏弘. (2013). 日本沿岸のストランディングレコード(1901-2012). 下関鯨類研究室報告 No.1:314pp.
・石川創 (2014). ストランディングレコード(2013年収集). 下関鯨類研究室報告 No.2:21-43.
・日本哺乳類学会編(責任編集:川道武男). (1997). レッドデータ 日本の哺乳類. 文一総合出版. 279pp.

目名	科名	和名	学名
クジラ目	マイルカ科	ハセイルカ	<i>Delphinus capensis</i>

評価結果
ランク外

・分布域の状況:

赤丸部分がマイルカ属の発見位置。九州周辺・東シナ海はハセイルカ、日本東方に近縁種マイルカが分布する。



・国際水産資源研究所が実施してきた鯨類目視調査結果より作図。

・存続を脅かす要因の具体的説明(捕獲採集圧以外)

存続を脅かす要因は考えられない。

・捕獲採集圧の状況

・ 捕獲はない。
・ 2004～2013年にマイルカ属34頭の座礁・混獲が報告されているが、種類別(マイルカとハセイルカ)の頭数は不明(石川ら(2013)、石川(2014))。

・個体数減少の状況

・ 混獲も少なく、捕獲もないので、減少する要因は見いだせない。

・評価に用いた系群又は個体群

系群に関する情報は不明。

・評価に用いなかった系群又は個体群

系群に関する情報は不明。

・特記事項

・ 1998年に公表された「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック(水産庁編)」においては、ハセイルカは、「日本近海のアセイルカについての生息状況および資源状態はまったく明らかでない。直接漁獲の対象になっていないこと、定置網等の沿岸漁業での混獲の報告も少ないことから、減少する傾向にはないと考えられる。しかしながら、分布域が比較的沿岸に限られ、分断されていることから、人的活動の影響を受けやすく地域個体群の崩壊が容易に起こる可能性がある。これらの点から現時点では希少種と評価するのが妥当と思われる。」と評価されている。
・ 現時点においては、目視情報も蓄積され生息状況もわかりつつあるものの、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行する要素は不明である。

手順1 定量基準の適用

1-1 カテゴリーを判定するに足る情報がある場合

→ 基準Eまたは準基準Eの適用へ

1-2 カテゴリーを判定するに足る情報がない場合

○ → 手順2へ

<基準E>

※ 密度効果ありと密度効果なしの判定結果のうち、最も絶滅リスクが高いものを採用する。

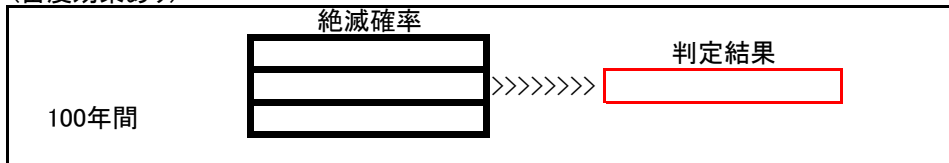
※ カテゴリーの基準は以下のとおり。

期間	絶滅確率	カテゴリー
10年間 or 3世代	50%	CR
20年間 or 5世代	20%	EN
100年間	10%	VU

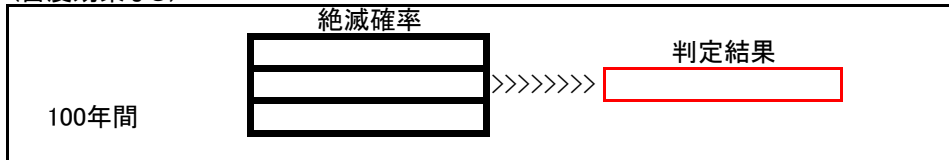
※ 期間については、10年間もしくは3世代、20年間もしくは5世代のどちらか長い期間を用いる。

世代時間= 年

(密度効果あり)



(密度効果なし)



<準基準E(簡易E基準)>

世代時間= <input type="text"/> 年	Year= <input type="text"/>	直近年
MVP= 500	N= <input type="text"/>	<input type="text"/>
Nt/MVP= <input type="text"/>		
% decrease= <input type="text"/>		
基準減少率(1-r**)	観測された減少率(1-r**)	判定結果
cr <input type="text"/>	>	<input type="text"/>
en <input type="text"/>	>	
vu <input type="text"/>	>	

定量基準の適用の結果

→ 絶滅危惧以外の場合は手順2へ

→ CR, EN, VUの場合は手順4へ

定量基準の判定に関する具体的説明

手順2 NT/LPの基準の適用

2-1 NTのカテゴリーを判定するに足る情報がある場合 → 以下の表に記入
分布域の一部において以下のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行しうるおそれがある。

a) 個体数が減少している。	<input type="checkbox"/>
b) 生息条件が悪化している。	<input type="checkbox"/>
c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。	<input type="checkbox"/>
d) 交雑可能な別種が侵入している。	<input type="checkbox"/>

2-1-1 NTの基準に該当する → NTとして基準の適用結果へ

2-1-2 NTの基準に該当しない → 2-2へ

2-2 LPのカテゴリーを判定するに足る情報がある場合 → 以下の表に記入
地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高く以下のいずれかに該当する。

① 生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルでみた場合絶滅に瀕しているかその危険が増大しているとは判断されるもの。	<input type="checkbox"/>
② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大しているとは判断されるもの。	<input type="checkbox"/>

2-2-1 LPの基準に該当する → LPとして基準の適用結果へ

2-2-2 LPの基準に該当しない → ランク外として基準の適用結果へ

2-3 NT/LPのカテゴリーを判定するに足る情報が無い場合。 → 手順3へ

NT/LPの基準の適用結果

→ 手順4へ

NT、LPの判定に関する具体的説明

- ・ 個体数の動向や系群構造に関する情報も不明であり、NT/LPを判定するに足る情報は無い。

手順3 DDの基準の適用

3-1 容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行する属性がある場合

→ 以下の表に記入し、DDとして定性基準の適用結果へ

a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。	<input type="checkbox"/>
b) 生息地が局限されている。	<input type="checkbox"/>
c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。	<input type="checkbox"/>
d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。	<input type="checkbox"/>

3-2 容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行する属性があるか不明である場合

→ ランク外として定性基準の適用結果へ

DDの基準の適用の結果

ランク外 → 手順4へ

DD、ランク外に関する具体的説明

- ・ 東シナ海から日本海、九州周辺に分布するが、分布が途切れている。
- ・ 発見数からみても、生息密度は低いと想定され希少の可能性もあるが、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行する属性があるか不明である。

手順4 付加的な事情の考慮

手順1～3によるカテゴリー案

ランク外

4-1 定量基準又は定性基準によるカテゴリー案の妥当性に看過できない懸念があるか否か

4-1-1 懸念がない → カテゴリー案を維持して手順5へ

4-1-2 懸念がある → 以下の表に記入し4-2へ

1) 自然変動による評価の妥当性への影響	
2) 再生産力による評価の妥当性への影響(成熟年齢、産卵数、寿命等)	
3) 持続的な資源管理による意図的な個体数減少	
4) その他の事情による評価の妥当性への影響	

4-2 1)～4)の付加的な事情があるか否か

4-2-1 付加的な事情があるとはいえない

→ カテゴリー案を維持して手順5へ

4-2-2 付加的な事情がある

4-2-2-1 カテゴリー案の妥当性に影響があるとは判断できない。

→ カテゴリー案を維持して手順5へ

4-2-2-2 カテゴリー案の妥当性に影響があると判断できる。

→ 具体的説明を記入し、カテゴリー案の変更について検討

上記付加的な事情の具体的説明

・本種と思われる捕獲がかつて日本海から五島でかなり記録されているが、実態は不明である。
・1998年に公表された「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック(水産庁編)」の「日本近海の本種は希少種」と判断は、現時点でもそれを覆す情報は無いものの、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行する属性があるか不明でありランク外との判断は妥当である。
・日本哺乳類学会は、日本近海の本種について不能と判定している(日本哺乳類学会編(1997))。なお、同学会のIUCN新基準仮評価は実施されていない。

上記検討の結果、カテゴリー案を 維持する → 手順5へ

手順5 最終カテゴリー

ランク外

・引用文献

・Perrin, W.F. (2002). Common dolphins, *Delphinus delphis*, *D. capensis*, and *D. torpicalis*. In: (Perrin, et.al. eds.) *ENCYCLOPEDIA OF MARINE MAMMALS*. p.245-248. Academic Press, New York.
・石川創、後藤睦夫、茂越敏弘.(2013).日本沿岸のストランディングレコード(1901-2012). 下関鯨類研究室報告 No.1:314pp.
・石川創 (2014). ストランディングレコード(2013年収集). 下関鯨類研究室報告 No.2:21-43.
・社団法人 水産資源保護協会.(1998). 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック(水産庁編).437pp.+4pp.
・日本哺乳類学会編(責任編集:川道武男).(1997). レッドデータ 日本の哺乳類. 文一総合出版. 279pp.